

広背筋皮弁のすべて **1**

—Breast & Chest—

企 画 に あ た っ て

広背筋皮弁は、有茎・遊離いずれの方法でも移植が可能であり、十分な大きさの皮弁を採取できるため、広範囲の皮膚軟部組織欠損に対応できる汎用性の高い再建手段です。身体のあらゆる部位への再建として応用可能であり、形成外科医であれば必ず習得すべき基本かつ重要な技術の1つと言えます。

例えば、乳房再建における広背筋皮弁の利用は古典的な再建方法でありましたが、近年再び注目を集めています。なぜなら、遺伝子検査陽性例における保険適用の拡大から両側乳房全摘の症例が増加しつつあり、両側に用いることのできる皮弁として広背筋の役割が重要となってきたからです。また、下腿難治性潰瘍や縦隔炎・膿胸など炎症を伴う欠損部へも、安定した血流を有する広背筋皮弁は極めて有用な再建オプションとなります。

広背筋皮弁の挙上において、皮弁のデザイン、血管柄や神経の処理は再建目的によって大きく異なり、それぞれに合わせた工夫とコツが求められます。そこで本特集「広背筋のすべて」では、採取部としての広背筋に着目し、再建領域ごとの手技を中心に解説いただきました。2号にわたる構成とし、本号では広背筋の解剖および胸部領域の再建を、後半（12号掲載予定）では頭蓋顎顔面や四肢領域の再建を特集します。

本号「Breast & Chest」では、広背筋の詳細な解剖学的知識を基盤とし、乳房再建における広背筋の内視鏡補助下の挙上と脂肪注入との併用といった最新のテクニック、そして縦隔炎や膿胸などに治療に難渋することの多い再建法について、臨床の第一線で活躍される先生方にご執筆いただきました。

「いまさら広背筋，されど困った時の広背筋」ではありますが，本特集を通じて，その採取部としての有用性にあらためて感じていただければ幸いです。日常診療において，皆様の臨床に役立てていただけることを願っております。

編集責任者
信州大学形成外科 杠 俊介
編集協力者
亀田総合病院乳腺科 浅野 裕子